

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第432号 平成24年11月9日

大山鳴動して

今回の騒動を、何と表現したらよいのでしょうか。「大山鳴動して鼠一匹」という諺がありますが、今回の騒動では鼠一匹も出ず、一方、震源地の方は消沈という状況です。

この世の中を騒がせている震源地は田中文部科学大臣であり、鳴動したのは、文部科学省、大学関係者、更には来年入学予定の学生らという事になりましょうか。

事の発端は、去る11月2日、田中大臣が、突然大学設置・学校法人審議会の答申を覆し、秋田公立美術大学、札幌保健医療大学そして岡崎女子大学の3大学の新設を不認可とした事です。

突然の不認可の方針に、これまで準備を重ねてきた学園関係者が激怒し、政府・国会を揺るがす大事となってしまいました。もしも、大学新設が認められない場合には、これまでハード、ソフト両面にわたって準備してきた学園側の損失は極めて大きなものがありますし、また、進学予定の学生たちにとっても、影響は甚大です。

田中大臣は、「大学の数が多過ぎ、運営に問題のあるところもある」「大学教育の質がかなり低下してきている」という問題認識を持っておられるようで、今回の不認可の判断もそういうところからきているようです。

確かに大学生の質の劣化が叫ばれて久しい訳ですが、それにも拘わらず事態は一向に改善されておらず、田中大臣の思いは分からない訳ではありません。そうはいつても、批判が高まると結局は認可を認めるという一連の顛末を見ると、今回の大臣の対応は蛮行というより愚行といった方が良いように思います。

どのような制度であれ、制度自体に公平性や安定性が確保されなければ国民の信頼は得られません。

例えば、今回問題となっている大学の新設については、文部科学大臣の諮問を受けた「大学設置・学校法人審議会」が、カリキュラム、教員数、校舎や財務の状況などを審査した上で、認可の可否を文部科学大臣に答申する仕組みになっています。

審議会において審査するのは、行政側の恣意性を排除する事、専門的な立場から客観的に判断するためであり、逆に言えば、厳正な審査の結果、基準をクリアしていれば新設を認可するというのがルールです。従って、審議会が基準をクリアしていると認めているのに大臣が新設を認めないというのであれば、その根拠を明確に

説明すべきです。単に気に食わないからというのでは、ルールを無視しているのは大臣の方であり、恣意的だとの誹りは免れません。

まして、審議会の判断が出た後になって、現行基準を超えたより厳しい基準を新たに作り再審査するという事になると、不利益を遡及して適用しようとするのに外ならず、また、従来の基準で認可されてきた大学との整合性も取れないのではないのでしょうか。

大学設置についての新しい基準を作るとするなら、まずは、今後の高等教育を如何にするべきか幅広い観点に立って検討しなければなりません。そうした手順を踏まず、唐突に新基準を持ち出しても、説得力はありません。

また、問題は既存の大学教育にあるのですから、田中大臣の思いを実現するとすれば、秋田公立美術大学など3大学の設置を認可した上で、新旧全ての大学に適用する基準を新たに作り、今後、その基準に則り全ての大学を再審査していくというのが、取るべき方法だったのではないのでしょうか。

「ノブレス・オブリージュ」という言葉が有ります。この言葉は、「位高ければ徳高きを要す」などと訳されていますが、田中大臣には、その地位に相応しい対応を取っていただくことを期待したいと思います。(塾頭：吉田 洋一)